

安曇野地区における長野県植物誌改訂に向けた活動報告

松田 貴子*

1 はじめに

安曇野市豊科郷土博物館は安曇野市の自然・歴史・民俗を紹介する総合博物館である。当博物館では現在、長野県植物誌改訂調査の安曇野地区の拠点として植物さく葉標本の収集を行っている。本報告では、主に市民とともに収集に取り組んでいる博物館友の会・植物調査部の活動内容について報告する。

2 友の会・植物調査部の概要

安曇野市豊科郷土博物館の友の会には 11 の部会があり、博物館事業の後援、博物館における学習活動並びにグループによる展示活動を目的としている。そのひとつである植物調査部は、安曇野地区に産する植物を調査した後に、さく葉標本を作成して博物館資料とすること、これらを通して植物の学習を推進することを目的として、2018 年（平成 30 年度）に発足した。2022 年度の会員数は 16 名で、安曇野市外に在住する会員もいる。

3 調査対象地および調査の進め方

調査では、年ごとに 1～2 箇所の調査対象地を定め、4～10 月にかけて毎月踏査し、できる限りすべての植物種を採集する。採集するタイミングは花や実をつけた状態での採集に努める。また複数人で

採集するため、採集者と植物和名を毎回記録しリストを作成することによって重複して採集しないように努めている。

表 1 に調査対象地の概要を示す。調査対象地の選定に当たっては、従来から知られている貴重な植生が維持されているようなエリアというよりも、里地里山のような人為的影響を継続して受けつつ、ある程度特徴的な立地環境を併せもった植生をなるべく取り上げている。また 2022 年の生坂村陸郷に関しては採集標本点数が少ない区画であることを根拠として選定した。なお、2021 年からは新型コロナウイルス感染防止のために、調査地を 2 箇所とし、1 回の調査人数を減らすように努めた。

さく葉標本は採集者が自宅で作製し、ラベルとともに新聞に挟んだ状態で、原則として 1 ヶ月以内に博物館に持参する。それらをマイナス 20℃の冷凍庫で低温処理した後、防虫剤を入れて収蔵庫で保管している。その後、11～4 月の間に標本のマウント（貼り付け）およびデータ入力を行うという流れになっている。

スタートして 3 年ほどは藤田淳一氏に同行いただき、標本の採集からマウントまで指導していただくことで、植物の学習とともに標本作製の基本についてある程度身につけることができた。現在は、例えば標本採集の経験のない会員が新しく参加すると他の会員がわかりやすく教えたり、樹木の枝のマウント方法等を共有したり、マウントの際にどういった

表 1 友の会・植物調査部の調査対象地

調査年	調査対象地
2018	安曇野市穂高牧 圃場整備が行われていない棚田
2019	安曇野市三郷 西側山地帯の林道
2020	安曇野市穂高～松川村 乳川、中房川合流部の河川敷
2021	① 安曇野市穂高 三川合流部の湧水地 ② 安曇野市明科～生坂村 岩州公園
2022	① 安曇野市豊科 耕作地 ② 生坂村北陸郷 林道

* 安曇野市豊科郷土博物館
〒399-7102 長野県安曇野市豊科 4289-8

配置がよいか意見交換するなど、標本の作製について学習しつつ一定の技術が共有できるようになってきている。藤田氏はその後も安曇野地域の各地で採集調査を継続し、同定についても協力いただいている。

調査の際に配慮していることについて述べる。傍目からみると、複数人が連なって時折立ち止まりながら歩いており時にはスコップで植物を掘り取っているため、疑念を抱かれる可能性がある。このため農地などでも人目につく調査地の場合は、その地区の自治会長などに4月ごろまでにお伝えするようにしている（関係者を通じて連絡が取れるとスムーズである）。調査時は名札をつけて、近くで農作業などをされている方には挨拶をするように心がけている。また各自、自家用車で集合するため、集合場所や駐車場について配慮する必要がある。このような調査にまつわる諸々の配慮事項については、博物館が主体となって実施していることで関係者の理解を得やすいと感じている。

4 標本学習会の実施

本活動で各自が採集した標本は、基本的に採集者が植物名を調べることにしている。その後、月1回「標本学習会」として各自作製した標本を博物館に持参し、自身が学習し同定した内容を共有するという機会を設けている。最初は図鑑の内容を写すところからスタートするが、記述されている形態を改めて観察したり、自分なりに疑問をもって調べると発見があり、「いつも見ている植物なのにはじめて知った」といったコメントとともに学習する喜びが伝わってくる場面が見られるようになる。学習会でその説明を聞いて、皆で顕微鏡を用いて確認したり、さらに疑問が出てくると、その場で改めて図鑑で調べることも少なくない。このため学習会は毎回、時間が足りないほどである。さらに興味をもったメンバーは、同じ属の植物を担当し、比較して調べてみるといった意欲もみられる。

一方で、困難な分類までは興味が持てないが、時間に余裕があり室内作業は協力したいというメンバーもいる。そういう方には、マウントやデータ入力などの作業を積極的にお願いしている。

5 調査の成果と広がり

個々の植物の成果については別途報告されている



標本採集のようす



標本学習会のようす

ため、本稿では総括的な側面を述べる。採集する植物は貴重な植物に偏らずすべての植物種を対象としている。採集を積み重ねていくことによって、地域のフロラを明らかにする資料の蓄積が進んでいるといえる。

安曇野市では2022～2023年度にかけて『安曇野市版レッドデータブック2014』の改訂が行われているが、その検討の際にこれらの標本データが活用されている。長野県新産地といったレベルの発見ではなくとも、市レッドデータに該当する植物で新たな生育地の記録となった種は少なくない。従来よりレッドデータの選定においては、基準となる数値情報が定量的に評価できるほど把握されていないことが指摘されている（芹沢2003）。地域フロラの把握を基盤として信頼性のあるレッドリストを作成するためにも、こうした地道な標本採集を積み重ねていかなければならないと考える。安曇野市版レッドデータブックは、絶滅の恐れのある野生生物だけではなく、安曇野市の自然の特性を明示し、市の重要な自然環境や外来種などの生物についても言及している。つまり生物多様性地域戦略を担う側面も併せ

もっている。自治体の生物多様性の取り組みに地域博物館が関わることの意義は大きく（白川 2011）、今後も安曇野市の環境行政と連携していく必要がある。

また当博物館には南安曇教育会から寄贈された、さく葉標本や昆虫類標本が多数あり、これらはかつての安曇野の姿を記録する貴重な資料である（松田 2022）。これら資料のクリーニングやデータ入力についても、植物調査部のメンバーがボランティアで協力し進めている。

このほか、メンバーの中には安曇野市内で自然に関わる活動に取り組んでいる方も多く、そういったネットワークの広がりの中で情報交換や取り組みが生まれている。たとえばメンバーが市内にある国営アルプスあづみの公園の公園サポーターを兼ねており、公園内に生ずる植物の生育情報や標本を博物館に提供いただいたり、希少植物の保全に向けて連携して取り組んでいる。

地域博物館の役割の一つには、地域の自然史研究の拠点として機能し、関心のある市民と連携しサポートすることがあげられる（渡辺 2016）。本会の活動も、規模は小さいがそうした役割も担っているといえる。

6 おわりに

本活動は長野県植物誌改訂調査をきっかけとしてスタートした取り組みであり、第一義的な目的である標本採集と作製およびデータ化についてはスムーズに実施できるようになってきている。しかし標本作製の作業が優先となり、メンバーの植物分類のレベルアップを図るような取り組みが不十分であると感じている。各自の興味関心に応じて学習を深めていくことが望ましく、今後の課題である。

標本の保管やデータの入力などの具体的な事項に

については、植物誌改訂委員会のなかで他施設ではどのようにしているのか伺ったり、疑問があれば相談することができ、とてもありがたいと感じている。

一方、当博物館における収蔵庫のスペースは限られており、一定範囲で確保できているものの、増加していく自然資料を今後収蔵することについては課題を抱えている。これは全国的な課題であり、近年はこうした課題の共有や各主体で試みられている課題解決のための手法等情報の共有が積極的に行われている（佐久間 2011）。これからも地方博物館として自然資料の重要性を情報発信していくこと、また次のステップとして、研究者等によってさらに標本が活用されるためにも標本情報を公開するなど、自然資料の価値を高めていく努力を継続していかねばならないと感じている。

引用文献

- 安曇野市（2014）安曇野市版レッドデータブック
松田貴子（2022）安曇野市教育会の植物標本．安曇野教育第 16 号 .50-55
海老原淳（2016）21 世紀のハーバリウム活用とその課題．分類 16(1).31-37
佐久間大輔（2011）博物館と生態学（17）自然史資料の文化財的価値—標本を維持し保全する理由—．日本生態学会誌 61.349-353
芹沢俊介（2003）維管束植物レッドデータブックの課題：(2) 地方版レッドデータブックの評価手法とチェック項目．分類 3(2).149-158
白川勝信（2011）博物館と生態学（15）地域博物館から地域生物多様性センターへ．日本生態学会誌 61.113-117
渡辺恭平（2016）生物多様性情報と地方自然史博物館．日本生態学会誌 66.247-252